

復活祭とノートルダム大聖堂

今年の復活祭は4月9日(日)。復活祭は春分の日から最初の満月を過ぎた日曜日、言い換えれば3月22日から4月25日までの間で、翌日の「復活祭の月曜日」と共に毎年移動する祝日である。子供たちにとっては庭や公園などに隠された「卵探し」を楽しむ日でもある。

復活、再生の春を象徴する卵、ウサギや鶏などの形でできたチョコレートがお菓子屋さんの店頭並び、一年で一番チョコレートが売れる日だ。夏時間制を続けているフランスでは3月最後の日曜日に冬時間から夏時間に移行する。一気に日が延びて21時近くまで日が沈まない。パリの並木は新緑が色付き始め、桜やモクレン、水仙など美しい花々が開き、自然も人も蘇る力を感じるのが復活祭だ。

復活祭のバカンスがスタートしたフランスは、これから7、8月夏のバカンスまで自然や太陽を求めて人が動き始める。爽快で明るい光に満ちた季節の始まりである。私も復活祭の卵チョコレートをいただいて、歩いて行けるリュクサンブール公園を散歩した。コロナ禍で誰一人入れなかったのが遠い過去となり、マスク姿は消



ム大聖堂が燃え上がった。翌日まで火は消えず、夜を徹して消火作業にあたる消防士を見守り、こんなことがあるのかと世界中が驚き涙を流した。暗い夜空に赤く火の粉が飛んでいる光景は長く見ていることが出来なかった。

えて、噴水の周囲に陣取っておしゃべりをしたり、家族でお昼のサンドイッチを楽しんだり、本を読んだり、人、人、人で一杯だった。観光客数もコロナ禍以前に戻り、一日中のどこかで晴々とした祝日を楽しんでいる人を見るのは嬉しい。

そして今年の復活祭ミサには4年振りでノートルダム大聖堂の大鐘「マリー」が鳴った。2019年4月15日夕刻ノートルダ

幸いなことに西の塔が奇跡的に残った。その西の塔には大鐘「エマニュエル」と「マリー」がセーヌ川に近い南に、その他8つの鐘が北に配されている。1686年ルイ14世と王妃マリー・テレーズ・ドートリッシュによってノートルダム大聖堂に寄進されたのが「エマニュエル」である。同じくパリにあるサクレ・クール寺院の大鐘に次いでフランスで2番目に大きな鐘だ。2019年の火災から逃れ、2019年9月30日ジャック・シラク大統領の棺がアンバリッドを出る時に鳴った。

2020年には4月15日火災一年後の祈りの鐘として響いた。「マリー」は古い大鐘の代わりに2012年オランダで铸造され、「エマニュエル」と同じく年に数回、特別な日にだけ鳴り響く。2016年7月ニースのテロ事件で犠牲になった人々の鎮魂に捧げられたのが「マリー」の鐘だった。



火災から丁度4年が過ぎた今年の4月15日。ノートルダム大聖堂の修復は進み、火災で焼け落ちた「ユジェーヌ・ヴィオレ・ル・デュックの尖塔」の再建が始まった。1859年8月天に向けて高々と建立された高さ96m、1400近い檜材パーツと鉛で造られた尖塔で、当時と同じ手法で同一の複製を作る修復作業である。火災直後から尖塔の複製に関わっている

木工職人さん達は誰もが皆、何世紀も前の職人と同じ方法で同じ動作で塔を造り直したことを誇りに思い、何世紀か先の職人に自分の仕事を伝えることができる喜びを語っている。自分の身体、感覚、意志を通して「歴史を生きている」実感を得られるのは幸せだと思う。

人も物も永遠ではないが、その人やその物が残したものを伝えることで続いていく技術や価値がある。そこに参与できた人の満足は想像に難くない。

パリの日常は混沌としている。ウクライナ戦争は終わらず命を落とす人が続き、インフレで生活苦しさを訴える学生や年金生活者が増えている。年金改正法案が国会を通ってもストライキやデモ行進は続き暴力行為が絶えない。

ようやく復活祭がきて、春になり、再生する自然に触れて、今日を無事に生かされていることへの感謝と謙虚な思いを持ちたいと思う。自己主張が先行するフランスでは難しいかも知れないが、自然や周囲の環境に自己を投影して、他者との共生や自分の成すべきことについて考える余裕が無くなりつつあるようで残念だ。（古賀順子記）